



No.49

2000年3月発行

# 新潟県支部報

マイ スコープ

## 福島潟に来たオオワシ

新潟市 伊藤 定市

冬が近付くと私はいつも特別なときめきを感じます。

春秋の渡りの時季はもちろんですが、野鳥を観察する日時の大部分を冬の時季にとっている私、野鳥観察にのめりこんで25年、いまだに初心者域を出ず、水辺の鳥中心の私は、各種大量の水鳥を見ることのできる冬季は楽しく胸をときめかせる時季なのです。

かつては寒さに縮こまって冬を嫌っていましたが、野鳥に親しむようになってからは冬も待ち遠しく感じられるようになりました。



送電線鉄塔上のオオワシ 1999.1.18

新潟市近辺では海岸の松林、鳥屋野潟、佐潟、信濃川、阿賀野川や少し足を伸ばせば瓢湖、福島潟

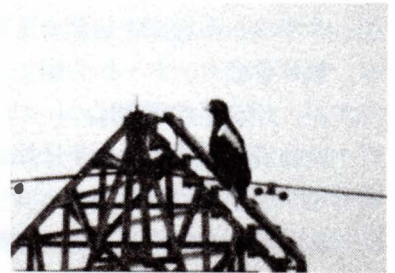
……と野鳥に親しめる場所はたくさんあり、中でも福島潟は最大なものです。

冬の福島潟でのお目当てはなんとといってもオオヒシクイ、ハクチョウなどのガンカモ類とオオワシ、オジロワシなど各種の猛禽で、さらに珍鳥への期待もあります。

私とオオワシとの出会いはもう20年以上になり、佐潟、鳥屋野潟でも会い記録写真も残してありますが、最近では福島潟でしか会う

ことができません。

福島潟に来るオオワシがいつも止まるのは福島潟の北東約3kmほどの水田の中の送電線鉄塔の上



今年も同じポーズで 2000.1.23

です。これは本間隆平さんや白井康夫さんに教えて頂いたものです。以来、福島潟に行った時は必ず管理棟の屋上から確認するようにしています。

昨冬は鉄塔の近くまで行って1000mmの望遠で撮影することができました。

今年もまた行って撮影しましたが、いつも同じ場所に同じポーズで止まっているので面白くありません。角度を変えて撮ってみましたがかわりばえがしませんでした。

昨年は私より30分ばかり長くねばった人は羽を広げて飛び立つところを撮れたと喜んでいましたし、今年は私もちょっと目をそらして三脚を付け替えている間に姿を見失ってしまいましたので、がまんくらべが大切だと思い知らされたのでした。

オオワシのおかげで、また来冬に希望をつなげています。

# 全国分布調査について

研究部 小池 重人・小野島 学

県支部では、1998年度に本部研究センターの依頼により、全国分布調査に協力することになりました。この調査は、1978年度に緑の国勢調査という形で実施された調査区域の比較調査です。数年前県支部では夏鳥調査を実施しましたが、そこに示されたように最近夏鳥が減少しつつあります。この調査もこういった現状を全国的に詳しく把握するためのものです。

新潟県では1998年度には56箇所実施しました。今年は山岳地域で14箇所実施する予定です。後日研究センターから報告書がでる予定ですが、1998年の調査については、研究センターからの中間報告を以下に掲載しますので参考にして下さい。

## A. 全国分布調査の進捗状況と中間報告

(日本野鳥の会研究センター, 1999)

### 1. 進捗状況

全国分布調査では、1998年に平地部を、そして2000年には山地部で現地調査を行なう計画で、調査を進めてきました。これらの進捗状況は、お陰様でほぼ予定通りですが、1998年実施できなかった若干の調査コースについて

では、1999年に補充調査を行いました。

・1998年現地調査・実施コース数 1,563コース(2001年までに調査が予定されている調査コース数は約2,360です。)

今回、現地調査を行なうにあたり、日本野鳥の会84支部と9つの自然保護団体の協力を得て調査員を推薦していただきました。1998年の実施に協力いただいた調査員の数は、合計1024人になります。

調査員の方からお寄せいただいた調査についてのアンケート集計結果では、9割の方が「定期的にやりたい」、あるいは「やりたい」とのご回答をいただきました(図1)。「やりたくない」については、多くの場合年齢や体力について自信がない等の理由でした。

ちなみに、調査の年齢構成を図2に示しました。40代が最も多く、次いで50代で約6割を占めています(図2)。最も少ないのは20代と70代で4%前後となっています。20代や30代の若手を育てていくことも、このような調査を継続していく上で大きな課題と思われます。

### 2. 中間集計

1998年は、平地部を対象とした調査でした

・コース変更数 全面変更：152コース  
一部変更：58コース

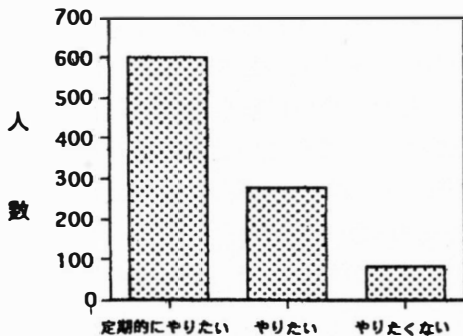


図1. 今後の希望

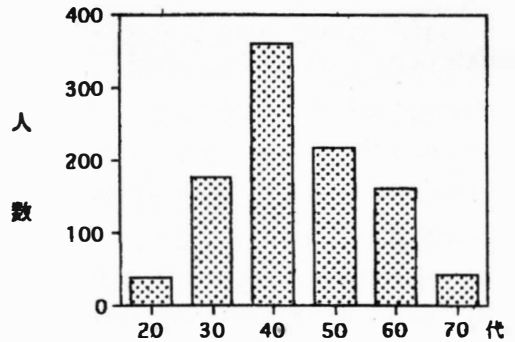


図2. 調査員の年齢別人数

が、20年前の結果と比較して特に変化の認められた種は下記の通りです。

- 1) 繁殖確実の記録が激減した種  
ミゾゴイ、ウズラ、ヒクイナ、チゴモズ、アカモズなど
- 2) 繁殖確実の記録が減少した種  
イヌワシ、エゾライチョウ、コジュケイ、カワガラス、シマアオジなど
- 3) 繁殖確実の記録が増加した種  
カワウ、アオサギ、ミサゴなど
- 4) 新たに繁殖確実の記録があった種  
ガビチョウ、ソウシチョウ、シマキンバラなど
- 5) 減少の可能性があるが何ともいえない種

- ホトトギス科のジュウイチ、カッコウ(図3・4)、ツツドリ、ホトトギスなど
- 6) 増加の可能性があるが何ともいえない種  
ドバトなど

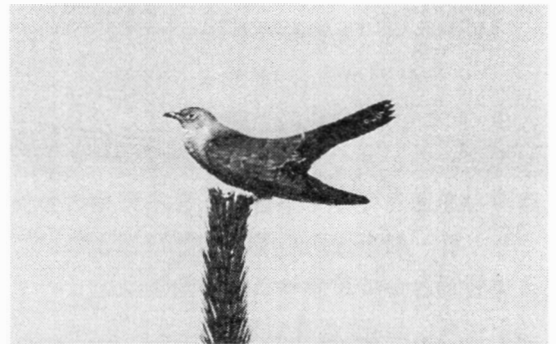


図3 カッコウ

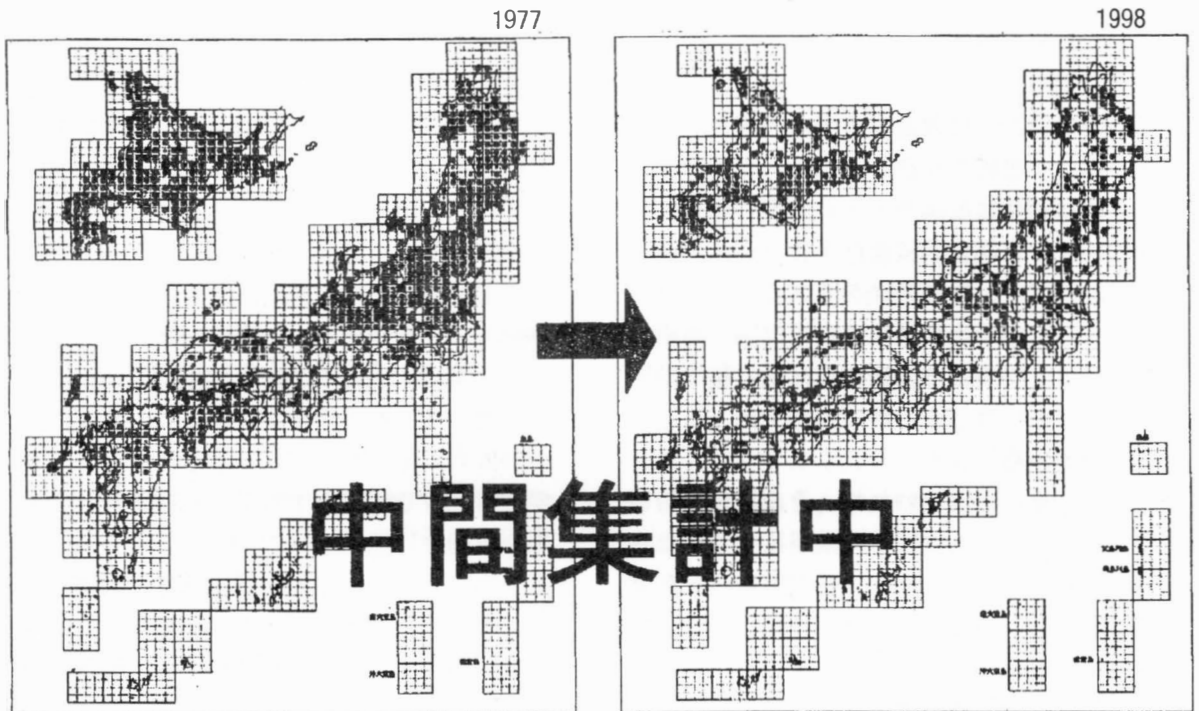


図4 カッコウの例(年により渡りの時期が異なり、補充調査が必要)

下記のグループは、1998年の現地調査で繁殖の確認が困難だった種です。

- 1) 山地部で繁殖する種(2000年に現地調査を予定)
- 2) 夜行性、薄暮性の鳥類: ミゾゴイ、ヨタカ、フクロウ類など
- 3) 海岸、島嶼部に生息する鳥類: カンムリウミスズメなど
- 4) 繁殖期が調査時期とずれた種: モズ、エナガなど
- 5) 繁殖のわかりにくい種: ヨシゴイ、猛禽類など
- 6) 集団繁殖性の鳥類: サギ類、カモメ類など
- 7) ホトトギスの仲間: 1998年の渡来時期が例年に比べ3週間近く遅かった。

# 鳥獣保護法が改正されて

保護部 山本 明

昨年(99年)「鳥獣保護及狩猟に関する法律」(略称「鳥獣保護法」)が改正されました。この法については今年の「野鳥」3月号及び4月号に、わかりやすく解説されているので、是非目を通して見て下さい。日本野鳥の会員として、一般市民から尋ねられたときに、答える資料として役立つことでしょう。

今回の改正にみられる大きな2本の柱

## (1) 特定鳥獣保護管理計画の創設

地域によって増え過ぎたり(例:シカ・イノシシ)または著しく減少してきた(例:ツキノワグマ・イヌワシ)鳥獣に対し、都道府県知事は上記の計画を立てて、人間との共存を目指して適切な対応をして行くというもの。それには個体数の調整・生息環境の保全・被害の防止など総合的に推進するという重要な面があります。当然モニタリング調査も行われます。なお特定鳥獣については国の権限で狩猟による捕獲制限の緩和や狩猟の制限期間の拡大なども行うことができます。

## (2) 地方分権の導入

地方分権の時代といわれ、その流れに沿ってこれまで国または都道府県が行ってきた許認可などの制限を、国から都道府県へまたは都道府県から市町村へと移行される部分が増えてきました。

その中で特に捕獲許可制度については、次のように変わりました。(以下都道府県=県)  
[旧法]・国の権限…県の権限以外のもの。・県の権限…有害駆除・学術研究・愛玩飼養・その他の目的。市町村への委任は必要に応じて県内部の判断で委任。

[新法]・国の権限…国設鳥獣保護区内の捕獲・保護繁殖を特に図る必要のある種(希少種等)・保護繁殖上支障のある方法での捕獲(かすみ網等)などに限定。

・県の権限…国の権限以外のもの。市町村への委任は必要に応じて条例(議会)を定めて委任。

つまり新法では県の権限を広げたものとなり、それは猟区設定の認可でも旧法では国であったのが、新法では県に移りました。ただ国としては、捕獲及び飼養許可等に関する事務について、都道府県に対して緊急時の指示(是正措置)を出すことができることです。

## 改正に当たって保護団体の取り組み

(財)日本野鳥の会を中心として、保護団体はかすみ網の使用許可権限を地方に移さない(移せば使用許可が安易に下りてしまう可能性があり)取り組みを重点に行い、多くの人々の協力でその通りの成果を得たことはご承知の通りです。また全国野鳥密猟対策連絡会は愛玩飼養の全面禁止、一度にできなければせめて2種以下にする運動を展開して、これまでの4種から2種以下とするという成果を得ました。

## 新潟県の対応

新潟県としては、特定鳥獣保護管理計画については、今後の県内の野生鳥獣の状況を見てから策定するとのこと。一方平成14年度までの第8次鳥獣保護事業計画については、国が計画の基準(改定案)を示したことで、本県でも見直し変更をするため新潟県自然環境保全審議会に諮問(すでに終了)、近く公表するとのこと、その内容が注目されます。なお、本県では平成9年度より有害鳥獣・学術研究・愛玩飼養については市町村に権限を委譲しています。

以上この法律の改正とその関連について記しましたが、保護団体としてこれから取り組む問題もあり(神奈川県や京都の支部では既に先行して取り組む)、どう取り組むかでの法律が生きてくる、そうでないと改悪に終わってしまうとも言われています。大いに関心を持って見て行きましょう。

# 紀行：カムチャツカ鳥類標識調査行（その1）

新潟市 千葉 晃

昨年の秋（1999年8月23～9月6日）、ロシア共和国カムチャツカ州で行われた日露共同鳥類標識調査に日本側第三次派遣隊の一員として加わり、見聞を広める機会に恵まれた。

憧れていた北の大地に立ち、永い間夢見ていた亜寒帯の鳥たちの生活をこの目で見、その声を己が耳で聴き、その息づかいをこの手に感じる事が出来た喜びを日記風に綴ってみたい。

この調査は、第2回から日本鳥類標識協会が財団法人日本自然保護助成基金（プロ・ナトゥーラ・ファンド）の助成を得て、ロシア科学アカデミー・カムチャツカ生態学研究所と共同で実施しているもので、その経緯や成果は別報したとおりである（千葉、1999）\*。

ここでは、言葉に尽くせない程美しいカムチャツカの大自然に浸った2週間の楽しい思い出と心優しいロシアの人々の暖かさに触れた私なりの気持ちを書き留めておきたい。

## \* 出発（新潟ーハバロフスクーペトロパブロフスク）

お盆の最中に慌ただしく準備したスーツケースを引きずり、小型ザックを背負い、ジャスコで買い求めた先方へのお土産を片手に総重量約100kgの塊（73kg分は私）が新潟国際空港に着いたのは23日の昼過ぎであった。

仲間4人（千葉の川邊さん、静岡の武田さん、福井の三原さん、鳥取の神谷さん：残念ながら同行者はすべて♂Ad）のパスポートを預かり、だれもロシア語が喋れない不安などはすっかり忘れ、心はずでにカムチャツカ半島に飛んでいた。機上の人と

\*脚注、日本鳥類標識協会バンダニューズNo.18 5～7（1999）

なり、2時間後には雲間からアムール川がシベリアの大地を大蛇のようにうねっているのが見えてきた。あっけなくロシアに着いてしまった。

ツポレフ旅客機はまだ夏の草花が絨毯のように広がるハバロフスク空港に吸い込まれるように着地した。半袖のシャツではもう肌寒い。空と風はもうすっかり秋だ。それに、空気がやけにさらっとしている。迎いのバスに乗り、観光客のごったがえすホテルでチェックインを終え、遅めの夕食をとった。

学生時代に日本文学を専攻していたという美人ガイドのイーリャさんのおかげですべてがスムーズに運んだ。翌日カササギの声で目を覚ますと眼下にはアムールの大河がゆったりとしたたたずまいを見せ、ユリカモメだろうか？白っぽい水鳥が数羽停泊中の大型貨物船の上を軽やかに飛び越していった。

スープ、チーズ、紅茶、パン、野菜の朝食をとり、イーリャさんに会えるのを楽しみに待つ。「オハヨウゴザイマス。ヨクオヤスミニナレマシタカ？」・「はい、もちろん」私を含めた皆がいやに上機嫌だ。白樺の木立が美しい坂の多いハバ市の中心街を抜け、また飛行



図1 機上から見たアバチャ湾



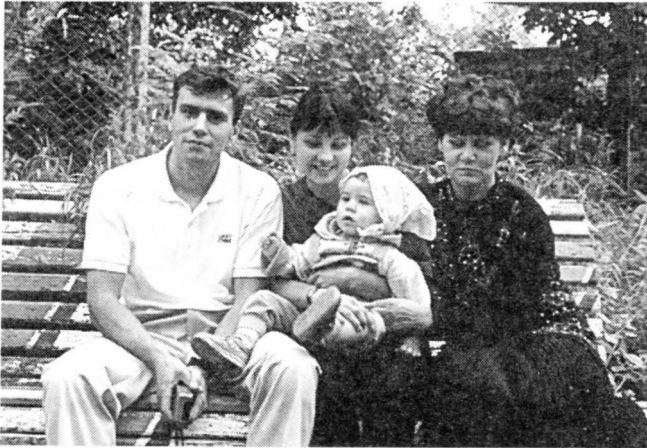


図2 ゲラシモフ博士のご家族

場へと向かった。

最終目的地ペトロパブロフスク市は、さらにジェット機で2時間を要する。市内には日本語で会社名などが書かれた中古車が多かった（これらの人々の間ではカッコがイイらしい）。再び機上の人となり、ヤポンスキー五人衆は一路北東に向かって飛び続けた。

サハリン上空を横切り、しばらくすると富士山のような秀麗な雪山が雲の上に顔を出してきた。ペトロ市のランドマーク、コリヤクスキー山（3,456m）だ。機が高度を下げて大きく旋回すると、アバチャ湾が手に取るように見える（図1）。この湾の一角には大きな三角州が広がり、いく筋もの流れが湾に注ぐ低地にはユリカモメの大繁殖地が形成されていると聞く。

冬、日本に飛来するユリカモメの「ゆりかご」がここであることを突き止めた京都市の須川さんとペトロ市在住の鳥学者ゲラシモフ博士（ロシア科学アカデミー）の共同調査のことが思い出された。間もなくそのゲラシモフ博士とご家族に会える。

鳥瞰したペトロ空港はまさしく空軍基地で、迷彩色を施した格納庫と軍用機があちこちに目立たないように配置されていた。お世辞にも立派とは言えない旅客ターミナルを抜け、迎えの人々の中にユーリ・ゲラシモフ博士の姿を探す。向こうがすぐ我々を見つけてくれた。握手をしたものの、ユーラ（ユーリ博士の愛称）の英語が早くてよくわからない。こ

れは困った。なにせ、これから2週間、ユーラさんだけが頼りなのだから。

### \* ガン飼育施設（ニコライ・ゲラシモフ博士の別荘）にて

ユーラさんはバンに我々の荷物を手際よく積み込むと、彼の父が別荘兼研究施設として利用している水禽飼育施設（シジュウカラガンとヒシクイの増殖に活用）へ案内してくれた。我々はここで2日間過ごし、役所から標識作業とキャンプの許可が下りるのを待つことになった。

手作りのコテージを思わせる博士の建物はアバチャ川のほとりにあり、樺の木立の中にひっそりとたたずんでいた。私たちを迎えてくれたのは、ニックさん（ゲラシモフ博士）と奥様のアラさん、それにユーラの弟イーゴリ夫妻と愛娘のゲラシモフ・ファミリーである（図2）。

満面の微笑みに迎えられながら、荷物を下ろしているとヤナギの枝先から「チョチョビ・チョチョビ・チョチョビ」と涼しげな声がしてくる。この声が聞きたかったのだ。メボソムシクイ類の声だ。捕獲はできるだろうが、この季節にこの声はもう聞けないものと思っていたので、喜びはひとしおだった。

新潟付近を例年5月下旬から6月上旬にかけてメボソムシクイ類が多数北上していくことはよく御存じだろう。このメボソムシクイ類は亜種「コメボソ」と考えられているが、この囀りとカムチャツカで聞いたメボソムシクイ類の囀りは酷似していたのだ。むしろ同じだといってよい。

やがてコガラの群が樺の枝先を伝って庭にやってきた。声は日本で聞くのと変わらないが、色はかなり白っぽい。キツツキが飛来し、幹を小回りしながら餌をさがしている。はじめてみるコアカゲラだった。ニックさんが手招きして、庭の奥へくるようにと誘っている。

背丈を越すヤナギランやツリガネニンジンの草むらを抜けると淀んだ小さな池があり、木立の間からシジュウカラガンの群が水面を



図3 増殖施設のシジュウカラガン

ゆっくりと泳いでいるのが見えてきた(図3)。半野生状態で飼育されているこれら水禽(オオヒシクイ、マガン、サカツラガンもいた)はニックさん自慢の友達なのだ。

空は青く澄み、時折甲高い声を立てながらセグロカモメが上空を通過していく。やがて遅い昼食が始まった。草花に囲まれた露天のテーブルに鮭とジャガイモのスープ(実に旨い)ワイン、ウオッカ、イクラを山盛りにしたバターつきパン、庭で栽培した新鮮な野菜サラダなどが所狭しと並べられている。

愉快で冗談好きのニックさんはアラさんとよく喋り、ロシア語と英語と時折入れる日本語にジェスチャーを交えて我々を笑わせた。話題は尽きる事がない。それにひきかえ、息子のユーラは寡黙だ。必要最小限のことしか言わないが、的確に物事を処理してくれる。

### \*ビストラヤ川目指して

26日の朝、庭の片隅にセットしておいたトラップにノゴマの幼鳥がかかった。新潟弁でいう「ダンジラ」だ。この鳥を肴に話しをしているとユーラさんの仲間がやってきた。車3台にキャンプ道具を積み込み、総勢12人で調査地のビストラヤ川(ここから約180km北にある調査地)を目指した。

ヤポンスキーはイーゴリの運転するトヨタのジープに乗った。町から離れると小高い山並みがみえ、やがて小さな平野を抜け、2時間も走ったころ、川のそばで車は突然とまった。後続のユーラ達を待つためだ。

ユーラは途中狩猟監視事務所、公園管理事務所、森林管理事務所などに立ち寄ってなにやら事務手続きをしなければいけないらしい。

川を眺めたり、景色を楽しんだりして過ごすうちにアジサシ、ケアシノスリ、カササギ、ハクセキレイな

などを認めた。この川はプリョトニコベ川といい、山地を流れるこのような場所で餌を探して飛ぶアジサシを見るとは考えてもいなかった(夢ではない。カムチャツカにいるのだ。日本でこのような景色と鳥の組み合わせはないのだから)。

ユーラたちが追いつき、さらに北を目指した。だんだん淋しくなり、道路の舗装が切れると行く手に高い山並が見えてきた。ダケカンバとハイマツが山腹を覆い、山好きの人にはたまらない景色が続いている。この山並みは2,000mを越す山々からなり、ガナルスキー山脈と呼ばれている(図4)。左手に広がる草地の奥に疎林が続いているのが見えた。その中をビストラヤ川が流れているのだという。キャンプ地は近い。(続く)



図4 ガナルスキー山脈

# 初冬の水鳥をたずねて

上越市 金子俊彦

11月23日の祝日に野鳥の会県支部の探鳥会が大潟町の朝日池畔で行なわれた。

当日は、暖かく穏やかな秋晴れの日であった。

朝8時半ころ池畔に着くと、私にとってのいつものメンバー以外に見慣れない顔が多くあり、今日は釣り人が多いのかな？と一瞬思った。そう言えば、11月は野鳥の会県支部と上越地区探鳥の会との合同探鳥会であったことを思い出した。

朝日池は、我々上越のバーダーにとっては、冬季間手軽に行ける絶好かつ貴重な探鳥ポイントである。鳥見を始めてからまだ数年の私でも、かなりの回数を通っているように思う。

福島潟や佐潟などの県内有数の水鳥探鳥池へはまだ訪ねたことはないが、朝日池はそれらに勝るとも劣らない好条件を備えているとのことであり、近くにこのような場所があることを幸せに思っている。

当日配布された資料によると'92年以降の県支部の朝日池探鳥会では、水鳥と陸鳥を合わせて毎年40数種類が確認されている。今回も鳥合わせでは48種が確認された。

さて、当日池畔に着くと、いきなりミサゴが近くの上空でホバリングしている姿が目に見え飛び込んできた。みなさん一斉に双眼鏡を空に向けている。私も慌てて取出し観察を始めた。下面の様子ははっきり見えるほど近いところでホバリングを繰り返しながら水中の獲物を狙っている。堤の道路で観察している我々の方を向いてホバリングしている姿は、なにか新潟・長岡方面からの遠来のお客に歓迎の気持ちを表わしているような仕草にも感じられた。そのうち、狙いを定めて水面に飛び込み、見事に大きな魚を足で捕らえ翔び上がった。これで、かのミサゴ君は今日の朝食は確保できたようである。



9時に主催者の挨拶があり、それぞれに双眼鏡やスコープで水面や上空の観察が始まった。上越地区以外からは22人参加されており、それに我々上越地区会員、それと超望遠レンズを構えたカメラ愛好家もおられ、池畔はいつにない賑わいであった。

ヒシクイやマガンは、まだ周辺の田園で朝食の最中なのか池の水面には、全く見られない。マガモ、コガモ、カワウ、カンムリカイツブリ、オオバンなどが観察できたが、カモ類の姿はあまり多くなかった。昨年はもっと数多くいたように思うのだが。

そんな中で、ミコアイサのオス1羽とメス(エクスプリも混在?)を合わせた約10羽が対岸の近くで一列になって右に左に泳いだり潜ったりしていた。親戚、家族一同で行進と潜水の練習をしているような楽しい光景であった。

そのうちに、「オオタカだ!」との声が上がると、急いで池と反対側の上空にめを向けた。

オオタカ(言われたから分かったままだが)が1羽西の方向に飛翔していく姿が観察できた。朝日池での探鳥は池の方向を見ていると、後方の上空を猛禽類などが飛翔するので、急に頭を回さなくてはならないので大変忙しい。

10時頃には、朝食を終えたヒシクイが隊列を組んで三々五々採餌場から帰ってきた。

スピードを落とし着水する姿はジェット戦闘機の着陸のようであり壮観だった。

10月末に飛来し、我々バーダーを興奮させ、楽しませてくれたシジュウカラガンは、まだ滞在中とのことであった。しかし、当日はマガンの姿はほとんど見られず、珍客にもお目



にかかるとはできなかった。

(シジュウカラガン飛来は12月3日の毎日新聞に大原淳一氏撮影のカラー写真が掲載され記事になっているのでご覧の方も多いと思う。)

10時50分から鳥合わせを行い48種が確認され、解散となった。

近年の我が家の必需品となっている野鳥カレンダーを事務局の方から購入し、午後の大潟町の町民会館での研究発表会に参加し、この道の奥深さに驚嘆しながら帰途についた。

帰途、朝日池に立寄ったら、釣り人が道もなく人の行けないような、普段は水鳥が沢山浮かんでいる対岸にまで入り込んでいた。上空のハクチョウも着水できず翔び去って行ったり、数少ないガンカモも池面の中央付近にかたまっている光景が見られた。

貴重なガンカモ類飛来地であるので良好な環境を保つために何らかの規制ができないものかとの感を強くした。しかし、釣り愛好者も楽しむ権利があるし、簡単に立入り禁止ともいえないであろう。なかなか難しい問題であるが、うまく両立できる道に関係者で探っていただきたいと思う。

## 朝日池に雁行を見る

川西町 黒島 善助

平成11年11月23日、日本野鳥の会県支部主催の朝日池探鳥会でのこと。数百羽のオオヒシクイが入り乱れて池に帰り始めたとき、池に居た別の群れが飛び立ち、頭上でガン特有



の編隊を組んで飛行を始めた。シャッターチャンスとばかり、パチパチやっていると、近くの方が、「オッ、見事な雁行だ」と。声を上げる。十日町地方には、昔から次の様な童歌がある。

ガンガン渡れ、大きなガンが先に、  
小さなガンが後に、帯になって渡れ、  
以前は十日町地方でも、この雁行があちらこちらで見られたので、童歌として歌い継いだものと思う。しかし、今では雁行を見ることはできない。それだけに、雁行を目の当りにして感激もひとしおであった。さて、この雁行だが、正確には「オオヒシクイの編隊飛行」であり、何故雁行と言うのか、菅原浩・柿沢亮三共著「日本鳥名由来辞典」のガンの項を見ると。ガン類は、ガンカモ科の中で大型のマガン、カリガネ、ヒシクイ、サカツラガン等の総称とあり。奈良時代には、主にマガンとカリガネがカリ、鎌倉時代になると、軍記物語で語調を強くする為、カリもガンと呼ばれる様になり、江戸時代にガンが一般名になった。……とある。従って「オオヒシクイの編隊飛行」などと、ややこしい表現でなく雁行でよい訳である。越後の名将上杉謙信が、能登の陣営で詠んだ詩文に、

霜は軍営に満ちて、秋気晴らし、  
数行の過雁<sup>カガン</sup>、月三更……以下略。

このとき、謙信が見た雁はなんなのか、近くの片野鴨池に行くマガンなのか、それとも謙信の故郷、越後を目指すヒシクイなのか、などなど思いをめぐらしながら……。

## 平成11年度研究発表会

研究部 小野島 学

平成11年11月23日、午前実施した朝日池探鳥会に引き続き、午後1時から、大潟町の「町民会館」へ会場を移して、支部研究発表会を開催した。

今回は支部会員3名から研究、調査及び探鳥における成果の発表があった。

### 1 県内の主なカモ類の個体の変動(山本明)

毎年1月に実施している、環境庁のガンカモ科鳥類生息状況調査から、高田公園を中心に県内のカモ類の生息数の推移を調査。

マガモ、コガモが増加しているのに比べ、カルガモ、オナガガモの数が減少している。特に留鳥であるカルガモの減少については、生息環境の変化による食性及び繁殖等の影響が考えられる。

### 2 コムクドリの産卵時期の変動(小池重人)

巣箱による調査で、1978年からの20年間にコムクドリの産卵時期が約2週間早まった。産卵時期は、新潟だけでなく渡りの中継地である沖縄の気温との間に大きな相関のあることが認められ、20年間、新潟及び沖縄の気温が大きく上昇していることから、地球の温暖化が原因である可能性の高いことがわかった。因みに新潟の桜開花期も早まっており、これも気温の上昇が原因であることが推察される。

### 3 カモメ類の野外識別(古川弘)

上越地域を中心に撮影したカモメ類の豊富な写真の中から、換羽による腫の識別のポイントを解説。

カモメ類は、成鳥羽に換羽するまで約4年を要し、幼鳥及び若鳥の判別が非常に困難であるが、各々の換羽期のスライドを基に、セグロカモメ、オオセグロカモメ、ワシカモメ、シロカモメ、ミツユビカモメ、ユリカモメ等について詳しく説明。

参加者は、午前の探鳥会に引き続き出席した24名であった。

## ウミアイサのカップルに乾杯

—寺泊探鳥会に参加して—

吉田町 鈴木 初江

入会して2年目。寺泊探鳥会も昨年に続いて2回目。昨年の凍りつくような寒さに驚いて、今年はおもこもこ着込んで、2月6日出かけました。

集合場所の「はまなす」会館で、渡辺弘雄先生のお話を聞いてから出発しました。寺泊港では、カモメたちが海面にたぶたぶと浮かんだまま出迎えてくれました。昨年、足の色による識別を教わったのに、カモメたちは足を隠したまま。それではと、羽の色や大きさを識別できるようにポイントを教えてもらいました。カモメ類は、ウミネコ・セグロカモメ・カモメ・ユリカモメを見ることが出来ました。

他にカンムリカイツブリが餌をとっており、水中に潜っている時間が長いことと予想以上に離れた地点に頭を出すことに驚きました。次に寺泊水族館に移動。岩の上にカモメ類が並んでいました。昨年たった一羽いたワシカモメを、また見られるのではないかと期待して見渡すと、いました。



ひとまわり大きなカモメが、一羽だけ、堂々として目を引きまします。明るいグレーの羽、頭も胸もまっ白。とても美しい姿です。見惚れていたら、突然、大きな口をカッと開けてグエーッと啼きだしました。ちょっと興覚めで、ワシカモメは黙って止まっていた方がいいと、勝手な感想をもちました。

## 日本野鳥の会 中部ブロック会議 報告

編集部 末崎 朗

ちょっと離れたところに、ウミウがいました。最近ヒメウがいなくなったと、みなさん心配そうに話しておられて気掛かり。冬の日本海としては、異例なほどの穏やかさで、鳥の個体数は昨年よりぐっと少ない気がしました。沖まで出かけた鳥が多いのだろうという話。

また車に分乗して、出雲崎港へ向かいました。途中で、ウミアイサを発見し、車を降りて観察。テトラポットの内側に、おしゃれなオスが2羽、地味なメスが2羽、かたまって泳いでいました。それが、並の泳ぎ方ではありません。オス2羽が精一杯の求愛行動をしているのです。思いきり背伸びして、1羽のメスにアタックしているのです。それも、オス2羽は、いっしょに号令でもかけているように、そろってのディスプレイ。何回も何回もいじらしい。メスも2羽いるのに、なんでそっちの方だけに夢中になるの…と思わず叫んでおりました。そっけないふうのメスでしたがしばらくすると、それぞれペアになって、仲良くテトラポットの向こうに消えていきました。やれやれ、よかった…。「アビじゃないか」の声で、また車を降りました。少し遠くて観察しにくい位置でしたが、アビの首の曲がり具合や嘴の形を説明してもらい、図鑑と見比べ確認できました。

そのとき、出雲崎方面から先導車が戻ってきたので、わが車の採鳥もそこまで。はまなす会館にもどると、ぷーんといいい匂い。お楽しみのタラ汁です。とてもおいしく体が芯から温まりました。事務局の本間さん担当のみなさん、ありがとうございました。その後、鳥合わせをしたら、ちょうど30種。わたしの見たのは15種。参加2回目としては、まずまずの成果で、十分楽しみました。望遠鏡を覗かせてもらったり、解説してもらったり、お世話になりました。

来年もよろしく願います。

昨年の11月13日～14日、新潟市の厚生年金スポーツセンターで、野鳥の会中部ブロック会議が開催されました。この会議は、年に1度富山、石川、福井、長野、山梨、静岡、愛知、岐阜、三重、新潟の各県の支部が持ち回りで開催し、会運営上の様々な問題点や本部への対応などについて話し合うもので、新潟県支部からは大島支部長をはじめ役員16名が参加しました。

初日には、大島新潟県支部長、岐阜県支部の沢島ブロック代表理事からのあいさつの後、野鳥の会本部の飯塚総務部長のあいさつがあり、会員と本部のつながりを大事に考え、野鳥誌を年10回から11回発行に戻したことなどを話されました。その後今回会議に参加した13支部の自己紹介と話題提供が行われました。それから本支部の渡辺央幹事と千葉晃副支部長がそれぞれ新潟の冬季の鳥と佐潟の環境についてスライドと資料を使った発表を行いました。日本海側の雪国では新潟と似たような鳥が見られるものの、それ以外の県ではワシやガン・ハクチョウ類は比較的珍しく、参加者の方々は皆熱心に聞いていました。また13日夕方と14日早朝に会場近くの佐潟で開いた採鳥会は寒いながらも2日も天気恵まれ、ハクチョウのねぐら入り、餌場への飛び立ち、オオタカの姿などを見ることができ、「佐潟水鳥・湿地センター」の設備の良さにも参加者



一同感激の様子でした。

夜は新潟の地酒を堪能しながら十分に懇親を深めた後、14日には協議会で3つの議案について協議しました。「大規模開発とワシタカ類の保護での各支部の対応について」の議案では、徳山ダムという大きなダムの開発問題を抱えている岐阜県支部の取り組みをもとに、ダムの検討委員等に野鳥の会会員がなれば、発言力も増し、その後も問い合わせがあるなどの提言がありました。また、「里山の保護について、道路建設との関連」という議案では、甲府支部から里山を護るための方法について各支部に問いかけがありました。これについては、道路問題などの場合、別ルートの提案などがあれば、行政側も動きやすいとの具体的な意見や、現状ではオオタカなど猛禽類の生息が大きな鍵を握っているが、何か別の方法の検討も必要ではないかとの意見もありました。さらに「会員増加についての手だて」という議案では、どの支部でも共通した会員数の頭打ちや減少、高齢化の現状が報告された後、探鳥会の開催だけでなく写真展などの様々なイベントの開催やその実施方法の工夫が必要などこれからの支部活動のあり方を考えさせる意見がたくさん出ました。

会議は最後に来年のブロック会議を富山県で行うことを決め、閉会しましたが、同じような問題意識を持つ他支部の方々と意見交換をし、交流を深めることができ、有意義な2日間であったと思います。

参加支部：富山県、石川、福井県、長野、甲府、富士山麓、沼津、南富士、静岡、愛知県、岐阜県、三重県、新潟県（順不同）

## 五羽のアオバズク

長岡市 川崎 健

長岡市金峰神社のアオバズクは毎年2羽が見られるが7月29日の長岡祭を前にして十二神社にて大量5羽のアオバズクを発見。二日間かけて写真撮影に成功。昨年最高の出来上がりとなった次第でございます。

親2羽に子3羽、横一列5羽揃ったのは一日だけ、あいにくレンズを持たず、後日4羽+1羽の段違いをとる。この十二神社では、はじめ7月12日に1羽だけが初確認され喜んでいたら、5羽のお出ましとなった。やはり樺に巣があった訳である。となり上条神社には毎年1羽だけが見られていたが、6月28日に初見、7月12日に2回目、又となりの土合神社では7月26日の撮影で三カ所並んで線路の裏側で見られた。又西側で見られたのは宮内で、4羽揃って確認されている。今年は何羽に出会えるだろうか。



十二神社のアオバズク

発行 2000年3月31日 No.49

発行人 大島 基 編集者 小林成光、末崎 朗、千葉 晃

日本野鳥の会新潟県支部

事務局 〒951-8116 新潟市東中通1番町86番地28

TEL 025-229-2018 本間由紀子方 〈振替口座〉00610-1-6002